

虚劳喘嗽門

◆ 虚劳証・陽亢陰虧

天津南門外の昇安大街に住む 92 歳になる張老女が、上焦の煩熱を病んだ。

病因：平素から健康強壯で、元陽が抜きんでて旺んであり長寿を享受していたが、80 歳を過ぎると陰分が次第に衰え、陽分偏盛になって胸間に常に煩熱を自覚するようになり、医師にかかり滋陰薬を多量に服用してようやく癒えた。90 歳を過ぎると陰がさらに衰えて陽がいよいよ亢進し、仲春〔陰暦 2 月〕になり陽気が発生すると煩熱が非常に激しく反復した。哈爾濱〔黒竜江省の首都〕^{ハルビン} 税務局長を勤めていた御令嗣の馨山君は、慈母が高齢になったので民紀 10 年〔1921 年〕に公職を辞して帰郷しよく世話をしていた。彼は拙著《医学衷中参西録》を熱心に読んで高く評価し、診察を依頼してきた。

証候：胸中が異常に煩熱し、激しいときは部屋にいらなくなり広間に行き戸口に長い間座って庭の空気を吸い込んでいた。時に熱が心を迫して怔忡不寧になり、大便は乾燥して 4～5 日に 1 回になり、甚だしいと薬を飲まないに通じなかった。脈は左右ともに弦硬で、時折結脈が現れたが至数は平常であった。

診断：証と脈を子細に考察すると、純粹に陽分偏盛・陰分不足の象であるが、この年まで長命であるのは元陽が充足しているからである。このときは陽が偏盛であるが、真陰を大滋して潜陽すべきで、苦寒で瀉してはならない。高齢者に結脈が現れても決して恐れることはないが気分

に不足があることを意味するので、大滋真陰の薬物を主とし少し補気の薬物を加えて脈を調えるのがよい。

処方：生山薬1両 玄参1両 熟地黄1両 生地黄8銭 天門冬8銭 甘草2銭 枸杞子8銭 生白芍5銭 野台参3銭 代赭石（細かく砕く）6銭 生鶏内金（黄色いものを搗く）2銭

合わせて大碗3杯の煎湯を1日量とし、徐々に頻回に温飲する。

方解：方中の意義は、大量の涼潤薬で真陰を滋し、少量の野台参3銭で脈を調える。薬性が温昇である野台参が上焦の煩熱を助長する恐れがあるので、倍量の生代赭石でこれを引いて下行させるとともに、本証ではもともと大便が出にくいので代赭石で胃気を降し大便を通じさせる。鶏内金を用いるのは胃気を助けて薬力を運化するため、甘草は弦硬の脈を緩めかつ涼薬の薬性を調和するためである。

効果：1日に1剤を3剤服用すると煩熱が大いに減じ、脈に結がなくなるとともに柔和になった。そこで方中の玄参・生地黄を6銭に改め、さらに竜眼肉5銭を加えて5剤を連服させると、諸症状はすべて消失した。

◆ 虚劳兼劳碌過度

天津2区に住む寧氏の40歳近い夫人は、生来虚劳があったがたまたま^{ろうろく}劳碌〔あくせく苦勞すること〕が過ぎてますます増悪した。

病因：恵まれない境遇と家庭内のいざこざで悩み、飲食が減って次第に虚劳になり、臥床して起きられなくなった。さらに、訴訟沙汰で法廷にかり出されて言い争い、半日苦勞して帰宅したのち症状が激しく悪化した。

証候：床に伏し眠っているように目を閉じ、呼んでも微かに目を開けるだけでものを言わず、何か言う場合も非常におっくうそうであった。顔色は熱が浮いたようで体温が38.8度あり、「心中に熱感があるか？ 怔忡〔動悸、落ち着かず不安感を伴うことが多い〕があるか？」と尋ねるとどちらにも頷いた。左脈は浮で弦硬、右脈は浮かつ^こ扎で、いずれも重按すると無力で1息6至であった。2日間で少しの重湯を飲んだけ

で、大便が数日間なく小便も非常に少量であった。

診断：脈が左弦・右芤でかつ浮数無根であることから、気血が極度に不足して陰陽がつながっていないことがわかる。陽気が上浮して顔面が熱く、陽気が外越するので身体が熱く、虚勞でもきわめて危険な証である。幸いにして呼吸はやや速いが喘にはなっておらず、咳嗽はあるが非常に激しくはないので、治る見込みがあると判断した。気血を培養〔育成〕しさらに気血を収斂する薬物で佐けて、陰陽を相互に連結させれば心配はなくなる。

処方：野台参 4 銭 生山薬 8 銭 山茱萸 8 銭 生竜骨（搗き砕く） 8 銭 枸杞子 6 銭 甘草 2 銭 生地黄 6 銭 玄参 5 銭 沙参〔浜防風〕 5 銭 生代赭石（細かく挽く） 5 銭 生白芍 4 銭

合わせて大碗 1 杯に煎じ、2 回に分けて温飲する。

再診：3 剤を連服すると、話せるようになって飲食も進み、浮越した熱が収斂して体温が 37.6 度に下り、心中に熱感がなくなり時に軽い怔忡を自覚したが、大便が 1 回通じ小便も出るようになったので、原方にやや加減してさらに服用させた。

処方：野台参 4 銭 生山薬 1 両 枸杞子 8 銭 山茱萸 6 銭 生地黄 5 銭 甘草 2 銭 玄参 5 銭 沙参 5 銭 生代赭石（細かく挽く） 4 銭 生白芍 3 銭 生鶏内金（黄色いものを搗く） 1.5 銭

合わせて大碗 1 杯に煎じ温服する。

方解：方中に鶏内金を加えるのは、虚勞の証では脈絡に瘀が多いからであり、《金匱要略》にいう血痺虚勞である。鶏内金で血痺を化せば虚勞の根を除くことができ、さらに野台参と併用すれば野台参の補力を運化して脹満を生じさせない。

効果：4 剤を連服すると、新たに生じた症状は消失したが、平素の虚勞はまだ全治しなかった。湯薬の服用をやめさせ、毎日生山薬細末を煮た粥に少し白砂糖を加えて点心〔軽食〕とし、服用のたびに生鶏内金細末を少し飲ませて病後の養生にした。

◆ 伏気化熱による肺労咳嗽証

瀋陽〔遼寧省の省都〕で戸籍登記係をしている32歳の高瑞章は、伏気化熱によって肺に傷害を受け肺労咳嗽証になった。

病因：臘底〔陰暦12月末〕に寒さを冒して戸毎（こごと）に調査をしていて寒涼を感受し、すぐには発病しなかったが以後汗が出なくなった。ついで心中に次第に熱感を覚え、仲春〔陰暦2月〕に入ると熱が甚だしくなり、食欲がなく咳嗽し徐々に肺労病になった。

証候：咳嗽は昼軽く夜に重くなり、時には咳に喘を兼ね、身体が痩せ衰えて筋骨がだるく痛み、意識が時に朦朧とし、空腹感はあるが食べたくなかった。これまでは心中の熱感だけであったが、今は夕方になると身体が常に熱く、大便が乾燥し小便は濃く少量になった。脈は左右ともに弦長、右は重按有力で、1息5至である。

診断：病因は伏気が化熱して長期に留まったため、肺だけでなく諸臓腑にも傷害が及んでいる。本人の説明によると、本証は陰暦12月末に寒邪を受けたことが原因であり、そのときすぐに発病しておれば傷寒である。受けた寒邪が非常に軽かったのですぐには発病せず、半表半裏の三焦脂膜中に伏在して気化の昇降流通を阻塞したために、身体から汗が出なくなり心に次第に熱を生じたのである。仲春〔陰暦2月〕になって陽気が萌動すると、春陽（したが）に随って化熱して温病が発症するが（《内経》に「冬寒に傷るれば、春必ず温を病む」とある）、大熱が暴発して裏から表に達するような温病とは違い、化した熱が三焦脂膜にそって諸臓腑に散漫するだけである。このために、胃が熱邪を受けて食欲がなくなり、心が熱邪を受けて意識が朦朧とし、腎が熱邪を受けて陰虚潮熱を生じ、肝が熱邪を受けて筋骨がだるく痛み、肺が熱邪を受けて咳嗽吐痰するようになって、伏気化熱が外面に現れたのである。本証を治すには、伏気の清熱を主とし津液を滋養する薬物（たす）で輔ける。

処方：生石膏（搗き砕く）1両 党参3銭 天花粉8銭 玄参8銭 生白芍5銭 甘草1.5銭 連翹3銭 滑石3銭 鮮茅根3銭 射干3銭

生遠志 2 錢

合わせて大碗 1.5 杯に煎じ 2 回に分けて温服する。鮮茅根がなければ鮮蘆根で代用してもよい。

方解：方中の意味は、石膏で伏気の熱を清し、連翹・茅根で熱邪を毛孔から透出し、さらに滑石・白芍で熱邪を水道から瀉出する。天花粉・玄参を加えるのは、実熱を清するのみの石膏とちがって、天花粉・玄参は同時に虚熱を清するからである。射干・遠志は石膏の清肺寧嗽^{たす}を助け、さらに利痰定喘する。甘草を用いるのは、涼薬が下趨〔すみやかに下方に移動する〕するのを緩めて寒涼が下焦を侵さないようにするためである。党参を加えたのは白虎加人参湯の方意^{なら}に倣ったもので、身体が虚弱な場合は必ず石膏と人参を併用しなければ、長期に伏在する熱邪を駆逐して外出することはできない。今の党参^{いにしえ}が古の人参である。

再診：4 剤を連服すると、熱は 3 分の 2 になって咳嗽吐痰も大半消失し、食欲が増し脈も緩和になった。伏気の熱はすでに消退し、残るのは陰虚の熱だけなので、さらに育陰の方数剤を多服すれば全治すると判断した。

処方：生山薬 1 両 枸杞子 8 錢 玄参 5 錢 生地黄 5 錢 沙参 5 錢 生白芍 3 錢 生遠志 2 錢 川貝母 2 錢 生鶏内金（黄色いものを搗く）1.5 錢 甘草 1.5 錢

合わせて大碗 1 杯に煎じ温服する。方中に鶏内金を加えるのは、助胃消食だけでなく諸薬の滞泥を化すからである。

効果：5 剤を連服すると症状はすっかり消失したが、夜間になお咳嗽がたまにあるので、湯薬の服用をやめ、毎日生山薬細末を煮た粥に白砂糖を混ぜて点心として服用させ、病後の養生にした。

◆ 虚劳咳嗽兼外感实熱証

撫順〔遼寧省の地名〕の姚旅長^{よう}の 9 歳になる令息は、外感実熱が長期間去らず虚劳咳嗽証に変わった。

病因：以前に外感を受けて熱が陽明に入ったが、医者が甘寒薬だけで

清熱したため、治癒した後もわずかな余熱が臟腑に稽留し、長引いて陰分を虧耗し、次第に虚勞咳嗽証を生じた。

証候：心中に常に熱感があって時には身体も熱くなり、食欲がなく咳嗽してしきりに痰を吐き、身体が痩せ衰えた。しばしば清熱寧嗽の薬物を服用し、すぐにやや効くがまた反復した。脈は弦数、特に右は弦で硬を兼ねる。

診断：脈の弦数は、熱が長引いて陰が涸れ血液が虧損したためである。右脈が弦で硬を兼ねるのは、以前の外感の余熱がまだ陽明の腑に留滞しているからである。咳嗽し痰を吐くのも、熱が長引いて傷肺したためである。本証の治療は、陽明の余熱を清するのが先決で、熱を清した後さらに真陰を滋養すれば根治は容易である。

処方：生石膏（細かく搗く）1.5両 党参3銭 玄参5銭 生山薬5銭 鮮茅根3銭 甘草2銭

合わせて茶碗1杯半に煎じ、2回に分けて温飲する。鮮茅根がなければ鮮蘆根でもよい。

方解：この方は、白虎加人参湯の知母を玄参に代えて粳米を生山薬に代え、さらに鮮茅根を加えてある。陽明に長く邪熱が鬱すると白虎加人参湯でなければ清熱できないが、慢性化して陰分に虧損があるので、原方をやや加減して滋陰を兼ねている。鮮茅根を加えるのは、昇発透達の性質があり、石膏と併用すれば清熱に散熱を兼ねるからである。

再診：2剤を煎服すると、身心の熱が大いに減じ咳嗽吐痰も大半消失して、脈も以前より和平になった。外邪の熱はすでに消失したので、さらにもっぱら滋陰薬で、陰分を充足させれば、おのずと余熱は消解すると判断した。

処方：生山薬1両 枸杞子8銭 生地黄5銭 玄参4銭 沙参4銭 生白芍3銭 生遠志2銭 白朮2銭 生鶏内金（黄色いものを搗く）2銭 甘草1.5銭

合わせて茶碗1杯に煎じ温服する。

効果：3剤を連服すると食欲が増し、諸症状はすべて癒えた。

方解：陸九芝は「外感実熱りくきゅうしの証で最も忌むべきは、甘寒滯泥の薬物だけを用いる治療である。たとえ治癒しても、常に余熱が稽留して永く臟腑中に錮閉こへいされて消散せず、熱が長引くと陰を消耗して次第に虚勞を生じ、薬で救えない場合が多い」という。これはまことに見識のある言である。私はこれらの証に対し、虚勞が甚だしすぎず脈が有力なら、常に白虎加人参湯で治療し、さらにやや加減して実熱とともに虚熱も除くようにすると、ほぼすべてに必ず奏効する。

◆ 勞熱咳嗽

隣村の18歳になる許姓の学生が、季春〔陰暦3月〕に勞熱咳嗽証になった。

病因：生来意志が強く、校内の年末期末試験で前茅〔上位の成績で合格すること〕に列したことがないので、発憤して一生懸命勉強し過度に心勞し、さらに新婚で年が若いために養生に失敗し、春陽が発動するころに次第に勞熱咳嗽証になった。

証候：日晡潮熱にっぽちようねつ〔夕方になると出る高熱。晡は申の刻すなわち午後3～5時〕し、夜通し灼熱が続き明け方に微汗が出ると灼熱が退いた。昼間の咳嗽はあまり激しくないが、夜は咳嗽で安眠できなかった。食欲が減退し身体が痩せ衰え、動くとすぐに息が切れた。脈は左右ともに細弱で重按すると根がなく、7至を越える数であった。脈が1息7至になれば挽回が難しいのに、まして7至を越えているではないか。なお幸いに摂食量はまだ十分で、大便是乾燥している（このような証では滑瀉がよくないので、まだ治せると判断した。真陰を峻補する方剤を、気化を収斂する薬物で佐けて治療した。

処方：生山薬1両 枸杞子8錢 玄参6錢 生地黄6錢 沙参6錢 甘草3錢 生竜骨（搗き碎く）6錢 山茱萸6錢 生白芍3錢 五味子（搗き碎く）3錢 牛蒡子（搗き碎く）3錢

合わせて大碗1杯に煎じて温服する。

方解：五味子を湯剤に入れるのに、薬局では慣習として搗かないが、

その皮の味は酸で核〔種〕の味は辛であり、そのまま煎じると味が酸に過ぎ、服用すると満悶を生じる弊害がある。したがって徐靈胎は、「味が辛である乾姜と同服するのがよい」と述べる。搗き砕いてから煎じると、核の辛味で皮の酸味を打ち消すので、乾姜の配合がなくても満悶を生じない。そこで大量の五味子で嗽を治したければ、搗き砕くように注意するか、病家に点検するように言っておくとよい。甘草を大量3銭用いるのは、方中の五味子だけでなく山茱萸も酸味が強いので、きわめて甘味の甘草で化合（甲己化土〔酸甘化陰〕）するのと、補益の働きが増す（酸は齒にしみるが、甘みを加えるとしみないのが、その証拠である）からである。

再診：3剤を連服すると、灼熱が退いたようで汗が出なくなり咳嗽もやや軽減したが、脈はやはり7至以上である。そこで脈の数は、陰虚だけでなく気虚も兼ねており、力のないものが重荷を負わされると身体がふるえるようなものだと気づいた。そこで真陰を峻補しさらに補気の薬物で輔けた。

処方：生山薬1両 野台参3銭 枸杞子6銭 玄参6銭 生地黄6銭 甘草3銭 山茱萸5銭 天花粉5銭 五味子（搗き砕く）3銭 生白芍3銭 射干2銭 生鶏内金（黄色いものを搗く）1.5銭

合わせて茶碗1杯に煎じて温服する。方中の野台参は満悶を生じる恐れがあるので鶏内金を加えて運化し、さらに甚だしい虚勞では脈絡間に瘀滞が多いので鶏内金で経絡の瘀滞をも化す。

三診：4剤連服すると灼熱も咳嗽も7～8割よくなり、脈も6至に緩和した。これは補気が有効である証拠なので、原方にやや加減して数剤を多服すれば根治し得る。

処方：生山薬1両 野台参3銭 枸杞子6銭 玄参5銭 生地黄5銭 甘草2銭 天門冬5銭 山茱萸5銭 生白芍3銭 貝母3銭 生遠志2銭 生鶏内金（黄色いものを搗く）1.5銭

合わせて大碗1杯に煎じて温服する。

効果：5剤を連服すると灼熱も咳嗽も消失し、脈も正常に戻った。湯

剤をやめ、生山薬細末を煮て茶湯にし新鮮な梨の自然汁を混ぜ、点心〔おやつ〕として服用させて病後の養生にした。

◆ 遺伝性の肺勞咳嗽証

天津1区玉山裏に住む18歳になる江蘇浦口出身の陳林生は、幼児期から肺勞咳嗽証を患っていた。

病因：御母堂に肺勞病があり、さらにさかのぼると外祖母〔母方の祖母〕にもこの病があったので、幼児期から遺伝素因でやはりこの病を患った。

証候：本証は、初期のうちは軽く、暑い時期になると普通と変わらなかったが、風邪をひくとすぐに喘嗽が生じた。治療するとすぐに治り、放っておいても2～3日で自然に治癒した。10歳を過ぎると次第に重くなり、暑い時期にも喘嗽があり、寒くなると悪化し、服薬で軽減したがすぐに反復した。16～17歳になると症状は増悪し、何度服薬しても効かなかったが、まだ我慢できていた。民紀19年仲冬〔1930年陰暦11月〕に私が診察するころには、症状は堪えがたいほど悪化し、昼夜小机に突っ伏して喘しかつ咳嗽し、痰をひっきりなしに吐いても竭きず、どんな中薬を服用しても少しも効かなかった。ただ毎日西洋医に注射を1本射ってもらうと、咳喘は止まらなかったが当日はなんとか過ごせた。脈は左右ともに弦細、関前は微浮で両尺は重按無根である。

診断：これらの症状は、肺の気化が通暢できないために、気管支に容易に痰がつまり、暑い時期には肺胞が弛緩するので症状がやや軽減するが、寒くなると肺胞が緊縮して症状が増悪するのである。肺中の気化を培養〔育成〕してこうへき闔關〔開閉〕を強化し、さらに肺中の気管支をそやく疏瀹〔塞がったものを通して流れをよくする〕し滞りなく宣通するのが、この病を治療する正規のやり方である。本証では両尺の脈が無根で、肺中だけでなく肝腎にも病があり、病因も遺伝性があるために、一度に治せないで、数段階に分けて治療するとよい。

処方：生山薬1両 枸杞子1両 天花粉3錢 天門冬3錢 生白芍3

錢 三七（細かく搗く）2錢 射干3錢 杏仁（皮を除く）2錢 五味子（搗き砕く）2錢 葶藶子（微かに炒する）2錢 細辛1錢

11味の薬のうち、はじめの10味を大碗1杯に煎じた湯で三七末1錢を服用し、残渣を再煎して三七末の残り1錢を服用する。

方解：方中の三七は、肺中の気が窒塞すれば肺中の血もこれに随^{したが}って凝滯するため、血の妄行を止める聖薬でなおかつ瘀血を流通する聖薬でもある三七を、初回の薬中に加えた。五味子を必ず搗き砕くのは、五味子の外皮は酸に偏り、核中の仁には頗^{すこぶ}る辛味があるので、酸辛相濟^{たす}けて収斂かつ開通するからである。五味子はそのま湯剤に入れて煎じるともっぱら酸斂にはたらき、服用後に満悶することがあるが、搗き砕くと乾姜を併用するまでもなく（小青竜湯中には五味子と乾姜を併用するが、徐靈胎は乾姜の辛味で五味子の酸味を調えると述べる）、服用後に満悶する弊害はなくなる。

再診：4剤を連服すると、咳喘ともに3分の2は軽減し、2～3時間横になって眠れた。脈は関前が浮でなく至数は少し減ったが、両尺は無根のようなので、さらに納氣帰腎の方をつくった。

処方：生山薬1両 枸杞子1両 野台参3錢 生代赭石（細かく挽く）6錢 生地黄6錢 生鶏内金（黄色いものを搗く）1.5錢 山茱萸4錢 天花粉4錢 天門冬3錢 牛蒡子（搗き砕く）3錢 射干2錢

合わせて大碗1杯の煎湯にして温服する。

方解：人参は薬性が補で微かに昇性があるが、代赭石と併用すると補益の力が湧泉に直達する。咳喘が激しいときは衝気・胃気がこれに伴って上逆するが、代赭石は降胃鎮衝の要薬でもある。方中の鶏内金は、希塩酸を含有するので気管支中の瘀滯を化して閉塞を開くとともに、人参の補力を運化して満悶を起こさない。

三診：5剤連服すると咳喘は消失したが、脈はなお5至を越え、動くとまだわずかに喘を覚えた。これは下焦の陰分がまだ充足しておらず、陽分と相互に連繫できないからである。真陰を峻補すべきで、陰分が充足すればおのずと陽分と連繫でき、呼吸が上奔しない。